

報 告

コウノトリの野生復帰に関する住民アンケート (2011年1月) 結果報告

* 本田裕子¹・菊地直樹²

The report of questionnaire survey on local people's awareness for the re-introduction of Oriental White Storks

* Yuko Honda¹ and Naoki Kikuchi²

¹ Chuo Gakuin University, 451, Kuzike, Abiko, Chiba 270-1196, Japan

² Institute of Natural and Environmental Sciences, University of Hyogo/Division of Research, Hyogo Park of the Oriental White Stork, 128, Shounji, Toyooka, Hyogo 668-0814, Japan

はじめに

野生復帰とは、野生下で絶滅した生物を飼育下で増殖させ、再び生息地に放すことである。これまでに世界中で行なわれているが、日本では、2005年9月以降兵庫県豊岡市で行なわれたコウノトリが初の野生復帰となり、続いて新潟県佐渡市においてもトキの野生復帰が2008年9月以降実施されている。著者のうち本田はこれまでにこれらの野生復帰事業についての住民意識調査を実施してきており、特にコウノトリに関するものとしては、本田(2006)が挙げられる。同調査はコウノトリ放鳥開始直後期(2006年1月)に実施された、兵庫県豊岡市全域住民1,000人を対象としたアンケート調査であった。本田(2006)では、当時、野生復帰事業が肯定的に受け入れられていたこと、特に「もともと野生の鳥だから」「地域の象徴だから」という直接的には金銭的な利益に還元されない視点で、野生復帰事業が評価されていたこと、が指摘されている。

本稿では、最初のコウノトリ放鳥(2006年)から5年が経過した時点での住民意識がどのようなかを把握するため、2011年1月に実施した豊岡市全域住民1,000人を対象としたアンケート調査結果を報告する。なお、同アンケート調査は2006年実施のもの継続調査としての

位置づけもあるが、本稿では、放鳥開始から5年が経過した2011年時点における住民意識の特徴について報告する。

調査方法

1. 調査方法

本報告でとりあげるアンケートは、2011年1月21日に郵送により実施(最終回収締め切り日2011年3月15日)されたものである。豊岡市において住民基本台帳より無作為に抽出した20歳から79歳の男女1,000人を対象にした。アンケートの回収数は566通であった(1,000通発送したうち、宛先不明等で返送されたものが6通あり、994通内566通で計算した結果、回収率は56.9%となる)。無作為抽出によるアンケートとしては、回収率は非常に高かった。

表1. アンケート票の構成。

質問番号	質問内容
1	回答者の年代・性別
2	回答者の居住地・豊岡市内の居住年数
3	地域(兵庫県・但馬地域・豊岡市)への定住意思
4	回答者の職業
5	豊岡市を象徴するもの
6	環境問題への関心の有無
7	かつて(昭和46年以前)の野生下でのコウノトリの目撃の有無
8	放鳥コウノトリの目撃について
9	コウノトリ保護への認識について
10	野生復帰の賛否について
11	野生復帰についての心配の有無
12	野生復帰についての期待の有無
13	放鳥コウノトリの豊岡での生息希望
14	放鳥コウノトリの豊岡以外への移動・生息について
15	暮らしの中での放鳥コウノトリへの意識
16	野生復帰成功のために何かをする意思
17	コウノトリ育苗農法で栽培されたお米について
18	放鳥コウノトリの野生としての認識について
19	放鳥コウノトリの生息数について
20	将来の農業被害について
21	給餌について
22	放鳥コウノトリの死亡について
23	放鳥コウノトリの責任主体について
24	回答者自身のコウノトリの位置づけ
25	野生復帰の評価
26	豊岡市の課題

¹ 中央学院大学

270-1196 千葉県我孫子市久寺家451

² 兵庫県立大学自然・環境科学研究所/兵庫県立コウノトリの郷公園

668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺字ニヶ谷128

アンケート票は全26問、枝問を含めると全65問となる。質問内容は表1の通りである。質問項目は、著者のうちの本田が2006年1月に同様の方法で実施したアンケート調査に準じたものであるが、最初の放鳥から現在に至るまでに発生した出来事や取り組みも質問項目に追加した。具体的には、放鳥コウノトリの豊岡市外への移動・生息、放鳥コウノトリの死亡、生息数についての評価、農業被害の可能性とその対策、また、豊岡市内を中心に但馬地域に広がりつつある「コウノトリ育む農法」、そして、豊岡市の課題について質問項目に加えた。

本節では、アンケート結果から、「回答者の特徴(年代・性別・居住地・定住意思・職業・環境問題への関心)」を取り上げ、それをふまえ、回答者が母集団である豊岡市全域住民をどのように代表しているのかを述べる。

2. 回答者の特徴(年代・性別, 居住地, 愛着, 職業)

回答者およびアンケート対象者1,000人の年代・性別・居住地(豊岡市合併以前の旧市町単位で集計)を表2にまとめた。

回答者の平均年齢は約56歳(55.94歳)であった。60歳代女性が最も多く、50歳代女性、60歳代男性が続いた。

アンケート対象者1,000人との比較では、60歳代女性の返信率が最も多く、50歳代女性、70歳代男性が続いた。また、居住地では、旧但東町と旧出石町の返信率が他の旧市町よりも高かった。

豊岡市内での居住年数では、「20年以上」居住している住民が最も多くなった(表3)。「生まれてからずっと」「20年以上」を合計すると、回答者の8割以上に達する。

居住地への定住意思について、「あなたは以下の地域内に特別な事情が発生しない限り、今後も住み続けようと思っていますか?」という質問をした。「おおいに思っている」の割合が最も大きかったのは、兵庫県内、次いで豊岡市内、但馬地域内となった(図1)。

職業は、特に兼業で農業従事されている回答者がいること等を想定し、複数回答とした(表4)。その結果、勤め人が最も多く25.8%、次いで無職が20.1%となった。農業は9.1%であり、その中で、農業のみと回答した専業農業従事者と推定される回答者は37人(72.5%)、農業だけではなく、他の選択肢も併せて回答した兼業農業従事者と推定される回答者は14人(27.5%)となった。そして、環境問題への関心の有無については90.0%の回答者が環境問題に関心があると答えていた(回答者数562人)。

3. 回答者と調査対象者の比較

ここでは、回答者がどのような母集団を代表している

表2. アンケート回答者および対象者1,000人の年代・性別・居住地。

年代	旧豊岡市			旧城崎町			旧竹野町			旧日高町			旧出石町			旧但東町		
	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
20歳代	6 (31)	10 (33)	16 (64)	1 (1)	0 (2)	1 (3)	0 (1)	1 (3)	1 (4)	2 (11)	3 (11)	5 (22)	2 (4)	3 (10)	5 (14)	1 (2)	2 (3)	3 (5)
30歳代	14 (45)	26 (58)	40 (103)	0 (2)	1 (2)	1 (4)	1 (5)	0 (0)	1 (5)	6 (14)	6 (14)	12 (28)	2 (6)	6 (9)	8 (15)	1 (5)	1 (2)	2 (7)
40歳代	21 (50)	20 (40)	41 (90)	0 (1)	5 (7)	5 (8)	1 (6)	4 (6)	5 (12)	6 (16)	9 (15)	15 (31)	5 (10)	1 (4)	6 (14)	1 (2)	1 (3)	2 (5)
50歳代	23 (47)	37 (50)	60 (97)	0 (1)	3 (3)	3 (4)	2 (4)	2 (5)	4 (9)	11 (21)	11 (18)	22 (39)	8 (16)	10 (10)	18 (26)	3 (3)	3 (3)	6 (6)
60歳代	33 (53)	47 (56)	80 (109)	1 (5)	4 (8)	5 (13)	3 (5)	7 (8)	10 (13)	18 (27)	12 (19)	30 (46)	3 (6)	12 (14)	15 (20)	4 (4)	9 (10)	13 (14)
70歳代	21 (27)	31 (54)	52 (81)	3 (3)	3 (8)	6 (11)	7 (10)	1 (3)	8 (13)	9 (15)	13 (22)	22 (37)	5 (6)	5 (6)	10 (12)	5 (7)	5 (9)	10 (16)

数値は、回答者数(配付数)を示す。

表3. 豊岡市内での居住年数 (N=561).

	回答数	割合 (%)
生まれてからずっと	215	38.3
3年未満	23	4.1
3年以上5年未満	6	1.1
5年以上10年未満	24	4.3
10年以上20年未満	44	7.8
20年以上	249	44.4
回答者数	561	100

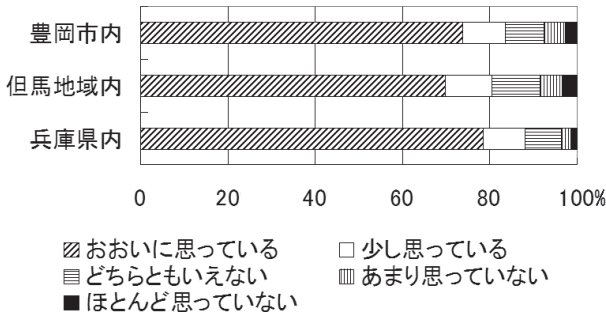


図1. 地域への定住意思 (豊岡市内 N=536, 但馬地域内 N=358, 兵庫県内 N=353).

表4. アンケート回答者の職業 (複数回答を含む).

	人数	割合 (%)
勤め人	145	25.8
無職	113	20.1
アルバイト・パートタイム	73	13.0
家事専業	68	12.1
自営業	63	11.2
農業	51	9.1
公務員・団体職員・教員	48	8.5
農業以外の1次産業	2	0.4
学生	2	0.4
その他	19	3.4
回答者数	562	-

のか、回答者の属性を、そもそも想定していた豊岡市全域の住民構成と比較する(表5)。具体的には、今回のアンケート回答者の構成について、2011年2月末時点の住民基本台帳(外国人を除く)との間で独立性検定を実施した(検定結果は表5注に記載)。

年代では住民基本台帳の構成とは異なるという結果となった。特に20歳代・30歳代や60歳代・70歳代において違いが見られた。性別に関しても、住民基本台帳の割合に比べて違いが見られ、アンケート回答者は女性に偏っていることがわかる。一方、居住地に関しては、アンケート回答者の居住地の構成は住民基本台帳の構成と同じとする帰無仮説は棄却されなかった。

結果から、今回のアンケート回答者は、年代と性別で一部代表性が認められないものとなった。年代につい

表5. アンケート回答者と母集団である豊岡市民との比較: 年代・性別・居住地・居住地.

年代	旧豊岡市		旧城崎町		旧竹野町		旧日高町		旧出石町		旧但東町	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
20歳代	6(2,241)	10(2,146)	1(198)	0(187)	0(257)	1(221)	3(756)	3(756)	2(499)	3(463)	1(237)	2(194)
30歳代	14(2,971)	26(2,820)	0(188)	1(183)	1(246)	0(235)	6(977)	6(977)	2(652)	6(532)	1(194)	1(154)
40歳代	21(2,737)	20(2,787)	0(186)	5(200)	1(276)	4(296)	6(986)	9(987)	5(591)	1(603)	1(219)	1(249)
50歳代	23(2,894)	37(2,963)	0(243)	3(267)	3(510)	2(349)	11(1,196)	11(1,178)	8(751)	10(759)	3(355)	3(336)
60歳代	33(3,132)	47(3,399)	1(306)	4(355)	3(376)	7(406)	18(1,286)	12(1,286)	3(787)	12(770)	4(390)	9(376)
70歳代	21(2,200)	31(2,754)	3(248)	3(312)	7(284)	1(398)	13(1,158)	22(2,086)	5(508)	5(645)	5(337)	5(404)
	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計
	6(4,387)	16(4,387)	1(385)	1(385)	1(478)	1(478)	5(1,566)	5(1,566)	2(499)	3(463)	5(962)	5(962)
	40(5,791)	40(5,791)	1(371)	1(481)	6(1,037)	6(977)	12(2,014)	12(2,014)	2(652)	6(532)	8(1,184)	8(1,184)
	41(5,524)	20(2,787)	5(386)	1(276)	5(572)	4(296)	15(1,973)	15(1,973)	5(591)	1(603)	6(1,194)	6(1,194)
	60(5,857)	37(2,963)	3(510)	2(349)	4(718)	2(349)	22(2,374)	22(2,374)	8(751)	10(759)	18(1,510)	18(1,510)
	80(6,531)	47(3,399)	3(376)	7(406)	10(782)	7(406)	30(2,538)	30(2,538)	3(787)	12(770)	15(1,557)	15(1,557)
	52(4,954)	31(2,754)	6(560)	1(398)	8(682)	1(398)	22(2,086)	22(2,086)	5(508)	5(645)	10(1,153)	10(1,153)

注1) 本アンケート結果及び住民基本台帳(2011年2月末時点)を基に作成。数値は、回答者数(住民基本台帳における人数)を示す。

注2) 年代: 有意差が認められた($\chi^2=56.57$, 有意水準1%, d.f.=5)。

注3) 性別: 有意差が認められた($\chi^2=11.54$, 有意水準1%, d.f.=1)。

注4) 居住地: 有意差が認められなかった($\chi^2=2.81$, d.f.=5)。

では、若年層の返信率が低いというアンケートそのものの課題であり、性別については、対象者抽出の段階ですでに女性に偏りが見られたことに起因している。しかし、一般的にアンケートにおいて、このような偏りが生じることはやむを得ない状況であり、本報告でも、偏りを前提にし、報告を行ないたい。

住民が捉える野生復帰に関する意識

アンケート結果から (1)「コウノトリの保護・野生復帰の認識」、(2)「暮らしの中でのコウノトリへの意識」、(3)「コウノトリ育む農法で栽培されたお米」、(4)「コウノトリの位置づけ」、(5)「放鳥コウノトリの生息」、(6)「野生復帰の評価と回答者の参加姿勢」、(7)「豊岡市の課題」の7項目に分けて報告していく。

1. コウノトリの保護・野生復帰の認識

コウノトリ保護への認識であるが、4つの質問をし、図2に結果をまとめた。図2から、豊岡市における保護増殖活動の認識、野生復帰が実施されていることの認識は、それぞれ96.8%、96.2%と非常に高い割合であった。また、県立コウノトリの郷公園についても、「存在を知らない」という回答はなく、行ったことのある割合は84.3%と高い割合であった。一方で、長年コウノトリの飼育や保護増殖活動に尽力され、新聞テレビ報道でも取り上げられるなど、広く認知されている松島興治郎氏(市立コウノトリ文化館名誉館長)の認知については55.9%と、他の質問に比べると高くはないが、半数以上の回答者に認知されていることは、私人であることを考えると高い割合といえる。

次に、野生復帰に関連した質問の結果を述べる。まずは野生復帰の賛否であるが、「おおいに賛成」が44.7%と最も高く、「どちらかといえば賛成」が次いで32.4%、

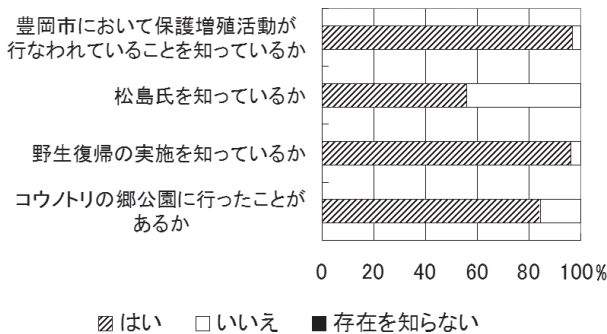


図2. コウノトリ保護への認識に関する質問結果 (豊岡市における保護増殖活動 N=560, 松島興治郎氏の認知 N=553, 野生復帰の実施 N=554, コウノトリの郷公園に行ったことの有無 N=555).

表6. 野生復帰の賛否 (N=564).

	回答数	割合 (%)
おおいに賛成	252	44.7
どちらかといえば賛成	183	32.4
どちらともいえない	101	17.9
どちらかといえば反対	23	4.1
おおいに反対	5	0.9
回答者数	564	100

「どちらともいえない」は17.9%、となった(表6)。一方で、「どちらかといえば反対」「おおいに反対」は合計して5%と少数となった。

「賛成」(「おおいに」「どちらかといえば」を含む)・「どちらともいえない」・「反対」(「おおいに」「どちらかといえば」を含む)の理由は以下の通りである(表7, 表8, 表9)。

賛成の理由で、最も選ばれていた回答は、「豊岡市の活性化になるから」であり、56.8%の回答があった。次に多かったのは、「環境にとっていいことだから」「もともと野生の鳥だから」「コウノトリにとっていいことだから」であった。野生復帰に対して、豊岡市の活性化を期待する側面があることが伺える。

野生復帰に対して「どちらともいえない」と回答した理由である(表8)。最も多かったのは「賛成・反対の気

表7. 野生復帰「賛成」の理由 (複数回答を含む)。

	回答数	割合 (%)
豊岡市の活性化になるから	247	56.8
環境にとっていいことだから	209	48.0
もともと野生の鳥だから	178	40.9
コウノトリにとっていいことだから	141	32.4
経済効果を生み出せるから	63	14.5
放鳥されたコウノトリを見て、肯定的な感想を持ったから	59	13.6
農業にとっていいことだから	51	11.7
自分にメリットがあるから	1	0.2
その他	13	3.0
回答者数	435	-

表8. 野生復帰「どちらともいえない」の理由 (複数回答を含む)。

	回答数	割合 (%)
賛成・反対の気持ちを両方感じているから	45	46.4
野生復帰がうまくいくかわからないから	26	26.8
自分の生活に関係があるのかわからないから	24	24.7
コウノトリに興味がないから	13	13.4
その他	14	14.4
回答者数	97	-

表9. 野生復帰「反対」の理由（複数回答を含む）.

	回答数	割合 (%)
税金の無駄だ／他の施策に税金をまわすべきだと思うから	17	65.4
農業に被害を与えるかもしれないと思うから	11	42.3
コウノトリに気をつかわなければならぬと思うから	4	15.4
自分に何のメリットもないから	4	15.4
野生復帰なんて無駄／成功しないと思うから	1	3.8
放鳥されたコウノトリを見て、否定的な感想を持ったから	1	3.8
コウノトリを目的に観光客などのよそ者が大勢来るから	0	0.0
その他	8	30.8
回答者数	26	-

持ちを両方感じているから」であり46.4%の回答があった。次に、「野生復帰がうまくいかかわからないから」「自分の生活に関係があるのかかわからないから」が26.8%、24.7%と続いた。「その他」では、「いいことだがお金がかかりすぎる」「他にもっと経費をかける分野があると考える」といった費用面での記述、「数の増加に伴い被害が心配」「農業でこまっている人が何人かおられる」といった農業面での記述、他には「なぜコウノトリだけにこだわるのか。絶滅しそう動物がけっこういるのに」などが記述されていた。

次に野生復帰に対して反対の理由である（表9）。結果から、「税金の無駄だ／他の施策に税金をまわすべきだと思うから」が最も多く選ばれていた。続いて、「農業に被害を与えるかもしれないと思うから」が多く選ばれていた。「その他」では、「昔、コウノトリが住んでいた様な環境と現在は違う」「現在のシカやイノシシの様に多くなったらどうするのか」といった内容等が記述されていた。

次に、放鳥コウノトリに対する責任（保護、事故の場合など総合して）を誰が最も担うべきかについて質問した結果を述べたい（表10）。なお、「責任」については、「放鳥されたコウノトリについて、誰がその責任を最も担うべきだと思いますか？」と質問票には記したが、実際の解釈としては回答者個々に異なる可能性は否定できない。

表10を見ると、最も多かったのは、「誰も担わなくていい」27.7%となった。次に多かったのが「豊岡市（行政）」で、「県立コウノトリの郷公園」「兵庫県（行政）」と続いていた。理由は、「誰も担わなくていい」に関しては、「放鳥したら野生の鳥」という趣旨の回答であり、放鳥コウノトリを野生の鳥として認識していることがわか

表10. 放鳥コウノトリの責任主体（保護・事故の場合等を総合して）.

	回答数	割合 (%)
誰も担わなくていい	148	27.7
豊岡市（行政）	84	15.7
県立コウノトリの郷公園	61	11.4
兵庫県（行政）	59	11.0
国民全体	54	10.1
豊岡市民全体	50	9.3
日本（行政）	25	4.7
周辺の住民	15	2.8
但馬県民局	11	2.1
兵庫県民全体	8	1.5
その他	20	3.7
回答者数	535	100

る。「豊岡市（行政）」に関しては、「野生復帰事業は豊岡市がしているから」といった趣旨が多く、「兵庫県（行政）」に関しては理由について「県の鳥だから」「県の施設だから」といった回答とは若干異なり、実際には県や国がしている事業に関しても、豊岡市がしているという誤解があるのではないかといえる。そして、「県立コウノトリの郷公園」については、「専門知識がある人に任せるのがよい」「足輪が装着され、研究対象になっているから」といった趣旨であった。

ここで、2つの方法で、責任の主体を整理したい。まず、住民か行政かであるが、表11の通りとなった。回答者の23.7%が住民に、44.9%が行政に責任があると答えている。「誰も担わなくていい」という回答が多かったこともあるが、住民か行政かといえ、回答者は野生復帰に関する責任を行政においている傾向があるといえる。

次に、地域の範囲で整理した。表12では、地域の範囲で整理したが、結果、回答者が選んだ割合は豊岡市27.9%、

表11. 責任主体の分類：住民か行政か.

責任主体	回答数	割合 (%)
住民（市民・県民・国民）	(127)	(23.7)
周辺住民	15	2.8
豊岡市民全体	50	9.3
兵庫県民全体	8	1.5
国民全体	54	10.1
行政	(240)	(44.9)
豊岡市	84	15.7
県立コウノトリの郷公園	61	11.4
但馬県民局	11	2.1
兵庫県	59	11.0
日本国	25	4.7
誰も担わなくていい	148	27.7
その他	20	3.7
合計	535	100

括弧内は各カテゴリの小計を示す。

表12. 責任主体の分類：地域の範囲（豊岡市・兵庫県・日本国）.

責任主体	回答数	割合 (%)
豊岡市	(149)	(27.8)
周辺住民	15	2.8
豊岡市民全体	50	9.3
豊岡市行政	84	15.7
兵庫県	(139)	(26.0)
兵庫県民全体	8	1.5
県立コウノトリの郷公園	61	11.4
但馬県民局	11	2.1
兵庫県行政	59	11.0
日本国	(79)	(14.8)
国民全体	54	10.1
日本国	25	4.7
誰も担わなくていい	148	27.7
その他	20	3.7
合計	535	100

括弧内は各カテゴリの小計を示す.

兵庫県26.0%, 日本国14.8%と, 日本国を除くと, 豊岡市と兵庫県が同程度に選ばれた結果となった.

以上のことから, 野生復帰に対する責任に関して, 住民か行政かといえば行政に, そして地域の範囲でいえば, 豊岡市・兵庫県に, おく傾向がある. しかし, 「誰も担わなくていい」という回答が最も多く, 放鳥コウノトリに関して野生の鳥と同様に見なす傾向があると考えられる.

次に, 野生復帰に関して心配なことがあるかどうかを報告する. 結果は表13の通りとなり, 53.7%と, 回答者の5割以上が野生復帰に関して心配なことがあるとした.

具体的にどのような心配をしているのかは以下の結果である (表14). 心配なこととして, 「鳥インフルエンザ等が発生するのではないかな」が52.3%を占めた. 本アンケート実施前後に, 全国的に鳥インフルエンザ発生のニュースが報道されたこともあり, その懸念が反映されたといえる. 次に, 「野生に帰すことが成功するかどうか心配」, 「農業面での心配」が続いた. 「その他」では, 農業被害など, 他の選択肢と重複する内容もあったが, 「行政の支援がいつまで続くか」「人寄せパンダ化するのではないかな」といった内容, 「費用対効果の不透明さ」「税金が上がるのではないかな」といった内容が記述されていた.

次に, 野生復帰に関しての期待の有無について取り上げる. 「期待する」と答えたのは回答者の73.9%であった (回答者数559人). 期待する内容についての結果は表15の通りである. 最も多かったのが, 「自然環境の復元」であり, 49.1%であった. 次に多かったのが, 「観光客の増加」であり, 30.2%であった.

表13. 野生復帰に関しての心配の有無 (N=559).

	回答数	割合 (%)
心配する	300	53.7
心配していない	181	32.4
何も思わない	78	14.0
回答者数	559	100

表14. 野生復帰による心配の内容 (複数回答を含む).

	回答数	割合 (%)
鳥インフルエンザ等が発生するのではないかな	156	52.3
野生に帰すことが成功するかどうか心配	130	43.6
農業面での心配 (農薬が使えなくなる, 苗が踏まれる等の心配)	93	31.2
日常生活において, コウノトリに気をつかわなければならない	47	15.8
今後, 周辺の開発ができないのではないかな	27	9.1
その他	26	8.7
回答者数	298	-

表15. 野生復帰に期待する内容.

	回答数	割合 (%)
自然環境の復元	202	49.1
観光客の増加	124	30.2
農作物の付加価値化による農業の活性化	45	10.9
観光・農業以外の産業振興	28	6.8
その他	12	2.9
回答者数	411	100

2. 暮らしの中でのコウノトリへの意識

暮らしの中でコウノトリを意識するかについては, 最も多かったのが「時々意識することがある」51.0%であり, 回答者の約5割が意識している. 次に, 「あまり意識しない」28.7%が続いた (表16).

具体的に, どのようなときに意識するかについては, 「実際に放鳥コウノトリを目撃した時」「新聞テレビ報道を見た時」が56.4%, 54.2%と多くなった (表17). 「田んぼの近くを通った時」「人工巣塔の近くを通った時」も45.0%, 35.8%と続いた. 5年が経過し, コウノトリの生息数も増加し, 実際に目撃する機会が多くなったことが, 実際の目撃や, コウノトリのいる田んぼや人工巣塔

表16. 暮らしの中でのコウノトリへの意識 (N=561).

	回答数	割合 (%)
常に意識している	65	11.6
時々意識することがある	286	51.0
あまり意識しない	161	28.7
意識したことがない	49	8.7
回答者数	561	100

表17. 暮らしの中でコウノトリを意識する時（複数回答を含む）.

	回 答 数	割 合 (%)
実際に放鳥されたコウノトリを目撃した時	197	56.4
コウノトリに関して、新聞テレビ報道を見た時	189	54.2
田んぼの近くを通った時	157	45.0
人工巣塔の近くを通った時	125	35.8
悪天候の時	21	6.0
農作業時	19	5.4
その他	11	3.2
回答者数	349	-

の近くを通った時といった回答が増加したと思われる。

次に、実際の暮らしでのコウノトリと回答者がいかにかかわったことがあるのか、目撃の有無と目撃の感想についての結果を述べたい。かつてのコウノトリが野生下で絶滅した昭和46年以前の日撃の有無であるが、回答者の26.2%が目撃したことがあった（表18）。一方、放鳥コウノトリの日撃は、回答者の85.6%が目撃していた（回答者数564人）。

表18. かつてのコウノトリの日撃の有無（N=564）.

	回 答 数	割 合 (%)
あ る	148	26.2
な い	363	64.4
覚えていない	53	9.4
回答者数	564	100

表19. 放鳥コウノトリの日撃回数（N=478）.

	回 答 数	割 合 (%)
ほぼ毎日	10	2.1
週に2-5回程度	38	7.9
週に1回程度	52	10.9
今までに5-10回程度	164	34.3
今までに3, 4回	78	16.3
今までに1, 2回	112	23.4
その他	24	5.0
回答者数	478	100

表20. 目撃した放鳥コウノトリの状況（複数回答を含む）.

	回 答 数	割 合 (%)
空を飛んでいた	318	66.4
田んぼにいた	308	64.3
人工巣塔の上にいる	216	45.1
コウノトリの郷公園にいた	180	37.6
川の中・川の近くにいた	177	37.0
湿地にいた	68	14.2
水路にいた	35	7.3
その他	32	6.7
回答者数	479	-

放鳥コウノトリの日撃回数・放鳥コウノトリの日撃状況に関しては、表19および表20の結果となった。日撃回数は「今までに5-10回程度」が34.3%と最も多かった。日撃状況は「空を飛んでいた」「田んぼにいた」が66.4%、64.3%と多く、「人工巣塔の上にいる」「コウノトリの郷公園にいた」「川の中・川の近くにいた」が続いた。

コウノトリを目撃した際に、どのような感想を抱いていたのか、次のような結果となった（表21）。回答者の54.1%が「嬉しかった」を選んでいて、次に「大きいと思った」「美しい／きれいと思った」が続いた。また、「追い払いたいと思った」「憎らしいと思った」がともにゼロ回答であり、野生復帰に懐疑的である回答者でも、放鳥コウノトリそのもの日撃に関して必ずしも否定的ではない感想を抱いていることもわかる。

表21. 放鳥コウノトリの日撃の感想（複数回答を含む）.

	回 答 数	割 合 (%)
嬉しかった	261	54.1
大きいと思った	234	48.5
美しい／きれいと思った	200	41.5
驚いた	95	19.7
希少／貴重だと思った	92	19.1
周囲の景色に溶け込んでいると思った	92	19.1
めでたいと思った	59	12.2
懐かしいと思った	44	9.1
何も思わなかった	17	3.5
戸惑った／気を遣うと思った	7	1.5
追い払いたいと思った	0	0.0
憎らしいと思った	0	0.0
その他	17	3.5
回答者数	482	-

3. 「コウノトリ育む農法」で栽培されたお米

今回のアンケートでは、「コウノトリ育む農法」で栽培されたお米に関する質問を行なった。現在、「コウノトリ育む農法」は栽培面積も増加し、保護の対象生物が農作物の付加価値となった代表例として、トキヤツシマヤマネコの事例においても参考になるなど、その影響力は大きい。しかし、その一方で、農業従事者には負担のかかる農法であることは確かであり、今後、この農法が定着していけるのか、そのためにはどのようなことが必要なのか、考えていかなければならないだろう。そこで、今回のアンケートでは、豊岡市民を消費者として考え、実際に購入しているのか、またどのように捉えているのかを報告したい。

これまでに購入したことがあるかについては、「購入したことがある」は20.3%、「購入したことがない」は73.1%であった（表22）。「お米は自分の家で作っている

表22. 「コウノトリ育む農法」で栽培されたお米の購入の有無 (N=562).

	回答数	割合 (%)
購入したことがある	114	20.3
購入したことがない	411	73.1
存在を知らない	37	6.6
回答者数	562	100

表23. 「コウノトリ育む農法」の認知度 (N=491).

	回答数	割合 (%)
今回初めて知った	30	6.1
名前を見たこと・聞いたことがある	221	45.0
どのような農法なのか少し知っている	177	36.0
どのような農法なのかよく知っている	63	12.8
回答者数	491	100

表24. 「コウノトリ育む農法」がコウノトリの生息環境の整備に役立つか (N=500).

	回答数	割合 (%)
おおいに役立つと思う	189	37.8
少しは役立つと思う	277	55.4
あまり役立たないと思う	28	5.6
まったく役立たないと思う	6	1.2
回答者数	500	100

から」といった趣旨の内容を加筆する回答者もあり、多くの人がお米をわざわざ買う必要がないという地域特性もあると考えられる。また、「存在を知らない」は6.6%と低く、認知度は高いといえる。

そもそも、「コウノトリ育む農法」の認知度については、「名前を見たこと・聞いたことがある程度」が45.0%と最も多く、「どのような農法なのか少し知っている」が36.0%と続いた(表23)。回答者の半数近くが農法について、よくまたは少し知っているという結果となったが、名前を見聞きした程度の認知も半数近くいる状況であることがわかる。

次に、「コウノトリ育む農法」がコウノトリの生息環境の整備に役立つかどうかについては「少しは役立つと思う」が55.4%と最も多く、「おおいに役立つと思う」が37.8%と続いた(表24)。多くの回答者が、「コウノトリ育む農法」が役立っていると考えていることがわかる。

そして、「コウノトリ育む農法」で栽培されたお米のメリットについては、回答が分散し、「コウノトリの生息環境の整備」が25.2%と最も多く、「豊岡市のPR・宣伝」が22.0%、「農村環境の保全・再生」が19.2%、「環境と経済の両立」が17.2%、「農業の活性化」が14.0%となった(表25)。

実際にお米を購入した回答者の購入目的には、「無農薬

表25. 「コウノトリ育む農法」で栽培されたお米のメリット.

	回答数	割合 (%)
コウノトリの生息環境の整備	126	25.2
豊岡市のPR・宣伝	110	22.0
農村環境の保全・再生	96	19.2
環境と経済の両立	86	17.2
農業の活性化	70	14.0
その他	12	2.4
回答者数	500	100

表26. 「コウノトリ育む農法」で栽培されたお米の購入目的.

	回答数	割合 (%)
無農薬や減農薬で栽培されたお米に興味があったから	65	58.6
コウノトリの生息環境の整備に協力したかったから	15	13.5
他の人に豊岡市やコウノトリを紹介したかったから	14	12.6
豊岡市の農業を支えたいと思ったから	7	6.3
その他	10	9.0
回答者数	111	100

表27. 「コウノトリ育む農法」で栽培されたお米の今後の購入意思 (N=111).

	回答数	割合 (%)
定期的に購入したい	33	29.7
たまに購入したい	60	54.1
もう購入しない	3	2.7
わからない	15	13.5
回答者数	111	100

や減農薬で栽培されたお米に興味があったから」が58.6%と最も多く選ばれていた(表26)。

そして、今後も購入する意思があるかについては、「たまに購入したい」が54.1%と最も多く選ばれていた(表27)。「もう購入しない」が2.7%と少数であり、既購入者の多くに、再購入の意思があることがわかる。

「コウノトリ育む農法」に栽培されたお米の購入者は多くはないが、豊岡市の地域特性をふまえると、決して低い数字ではない。購入動機にあった「無農薬や減農薬への興味や関心」をうまく購入につなげることが、購入の拡大につながるとされる。

4. コウノトリの位置づけ

ここでは、回答者にとってのコウノトリの位置づけ、すなわち、どのような存在なのか報告する。まず、「豊岡市を象徴するもの」で最も強くイメージするものについての結果である(表28)。「コウノトリ」を象徴とする回答が39.3%と最も多かった。同程度で「かばん」が38.2%と、「コウノトリ」と「かばん」で、ほとんど二分する結

表28. 豊岡市を象徴するもの.

	回答数	割合 (%)
コウノトリ	220	39.3
かばん	214	38.2
温泉	21	3.8
円山川	19	3.4
但馬牛	17	3.0
天候	15	2.7
カニ	13	2.3
そば	7	1.3
盆地	7	1.3
神鍋高原	6	1.1
日本海	5	0.9
玄武洞	3	0.5
田んぼ	3	0.5
スキー場	2	0.4
辰鼓楼	2	0.4
海水浴場	1	0.2
オオサンショウウオ	0	0.0
その他	5	0.9
回答者数	560	100

表29. 回答者にとっての「コウノトリ」.

	回答数	割合 (%)
豊岡市の誇り／象徴／シンボル	202	36.3
豊かな自然環境の象徴／バロメーター	91	16.4
他の生き物と一緒に	78	14.0
豊岡市の活性化の起爆剤／きっかけ	63	11.3
かけがえのない生き物	50	9.0
別に何も思わない	21	3.8
豊岡市を学ぶ／知るうえでの題材	20	3.6
経済効果を生み出すもの	8	1.4
世話のかかるもの／面倒なもの	8	1.4
農作物を販売するうえでの付加価値	5	0.9
苗を踏み倒す害鳥	3	0.5
その他	7	1.3
回答者数	556	100

果となった。「豊岡市の象徴」としてイメージするものが、多くの回答者の中でまとまりつつあることが伺える。

次に、「あなたにとって『コウノトリ』とは何ですか」の質問結果である(表29)。「豊岡市の誇り／象徴／シンボル」が36.3%と最も多く選ばれていた。次に、「豊かな自然環境の象徴／バロメータ」が16.4%、「他の生き物と一緒に」が14.0%、「豊岡市の活性化の起爆剤／きっかけ」が11.3%であった。

豊岡のシンボルや豊かな自然環境の象徴、活性化の起爆剤という捉え方の一方で、「他の生き物と一緒に」という捉え方が上位にあることは、コウノトリを他の生き物と同様に見なそうとする傾向があることも伺える。これは、前述の、野生復帰に関する責任主体の質問結果において、「誰も担わなくていい」という回答が最も多く選ば

れていたことにも関係するだろう。自然下に生息する様々な野生生物と同列に少なくとも捉えるべき、という考えが「他の生き物と一緒に」、「誰も担わなくていい」それぞれを最も選んだ背景にあると推察される。また、「経済効果を生み出すもの」「農作物を販売するうえでの付加価値」という、金銭的な利益に直結するものとして捉える割合はそれぞれ1.4%と0.9%と少なかった。また、「世話のかかるもの／面倒なもの」「苗を踏み倒す害鳥」に関しては、それぞれ1.4%と0.5%と少なかった。

以上のように、コウノトリに関して回答者の多くは「豊岡市を象徴するもの」として位置づけていることが伺える。

コウノトリが今後野生下で生息していく中で、その捉え方を把握していく必要がある。そこで、放鳥コウノトリの野生としての認識について、そして、放鳥コウノトリの死亡に関して質問した。前者は具体的には、他の動物と比較して、放鳥コウノトリがどの動物と同様に「野生」だと思えるかを質問した。結果、「釧路湿原のタンチョウ」という回答が44.2%と最も多く選ばれた(図3)。他の選択肢に比べ、「釧路湿原のタンチョウ」に回答が集中していることがわかる。

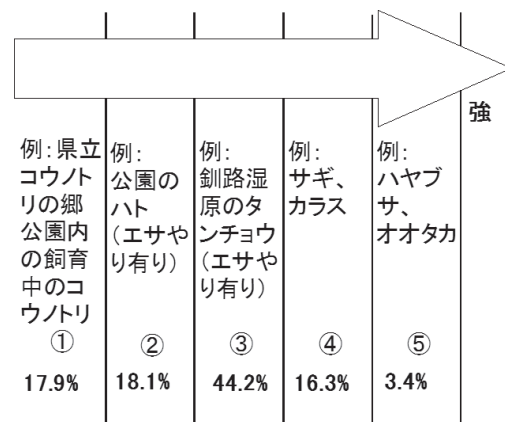


図3. 放鳥コウノトリの野生としての認識 (N=496).

表30. 放鳥コウノトリの死亡についての感想 (複数回答を含む).

	回答数	割合 (%)
野生の生き物なので仕方がない	428	76.6
かわいそう／悲しい	179	32.0
自然環境の整備が必要と感じる	122	21.8
今まで費やした税金の無駄だと思う	46	8.2
これ以上野生復帰をする必要がないと思う	20	3.6
行政に責任を感じる	18	3.2
天敵となる動物を駆除すべきだと思う	18	3.2
関心・興味が無い	16	2.9
そもそも野生復帰をしなればよかった	7	1.3
その他	10	1.8
回答者数	559	-

放鳥コウノトリの死亡に関しては、「野生の生き物なので仕方がない」が76.6%と最も多く選ばれていた(表30)。次に、「かわいそう／悲しい」が32.0%、「自然環境の整備が必要と感じる」が21.8%と続いた。回答者の多くが放鳥コウノトリを野生の生き物として、その死を捉えていることがわかる。「その他」では、「原因を追究する必要がある」といった趣旨の記述もあった。

本節からも、放鳥コウノトリを野生の鳥として捉える傾向があることが伺えた。その捉え方は、釧路湿原のタンチョウといった、場合によっては人の手が必要であるという認識であった。このことに関しては、給餌のあり方の質問結果を次節で報告する。

5. 放鳥コウノトリの生息

本節では、放鳥コウノトリの生息に関して、回答者がどのように考えているのか、生息希望、豊岡以外での移動・生息、現在の生息数といった生息に関するものと、議論もされている給餌のあり方、そして、生息の結果、可能性としてある農業被害について質問した結果を報告する。

まず、豊岡での生息を希望するかについては表31の通りとなった。回答者の76.1%が「生息してほしい」と答えた。「どちらでもいい」は20.4%であり、その一方、「生息してもらいたくない」「関心がない」は0.5%、3.0%と少数であった。

「生息してほしい」と答えた回答者に、具体的にどのような理由なのかを質問した結果は表32の通りである。「地域の誇り・象徴・シンボルとなるから」が31.2%と最も多く選ばれていた。また、ほぼ同じ割合で「自然環境が

表31. 放鳥コウノトリの豊岡での生息希望 (N=564).

	回答数	割合 (%)
生息してほしい	429	76.1
生息してもらいたくない	3	0.5
どちらでもいい	115	20.4
関心がない	17	3.0
回答者数	564	100

表32. 放鳥コウノトリの豊岡での生息希望の理由.

	回答数	割合 (%)
地域の誇り・象徴・シンボルとなるから	133	31.2
自然環境が豊かであることを示すから	125	29.3
もともとコウノトリが生息していたから	85	20.0
地域の活性化につながるから	46	10.8
コウノトリが見たいから	24	5.6
経済効果を生み出すから	6	1.4
その他	7	1.6
回答者数	426	100

豊かであることを示すから」が29.3%であった。また、「もともとコウノトリが生息していた」の回答も20.0%であった。

次に、放鳥コウノトリの豊岡以外への移動・生息に関して質問した結果である(表33)。

「豊岡で生息しているコウノトリがいれば、かまわない」という回答が60.4%と最も多く選ばれていた。次に多く選ばれていたのが「豊岡でも豊岡以外でもどちらでもいい」が24.5%であった。「豊岡以外に移動・生息してほしくない」は8.8%に過ぎず、豊岡への生息を望みつつ、豊岡「外」での生息も容認する者が大半を占めていた。

そもそも、現在の生息数についてどのように認識しているのか。質問では、「2010年12月28日時点で、44羽のコウノトリが野生下で生息しています」と説明した上で、現在の生息数、そして、今後の生息数について質問した。結果、現在の生息数については、「少ないと思う」が47.6%と最も多く選ばれ、次に「ちょうどいいと思う」35.1%が続いた(表34)。「多いと思う」が17.3%と他の選択肢に比較すると多くなく、現在の生息数については、「少ない」もしくは「ちょうどいい」と認識していた。

今後の生息数については、「増えてほしい」が66.0%と最も多く選ばれ、「現状の数を維持してほしい」が32.7%と続いた(表35)。「減ってほしい」という回答は1.3%と少数であった。

次に、給餌について質問した結果を報告する。質問では、「放鳥コウノトリの多くが、コウノトリの郷公園で餌を食べていること」を知っているか否かを聞き、その上

表33. 放鳥コウノトリの豊岡以外への移動・生息に関して.

	回答数	割合 (%)
豊岡で生息しているコウノトリがいれば、かまわない	338	60.4
豊岡でも豊岡以外でもどちらでもいい	137	24.5
豊岡以外に移動・生息してほしくない	49	8.8
関心・興味がない	24	4.3
豊岡以外に移動・生息してほしい	2	0.4
豊岡でも豊岡以外でも生息してほしくない	2	0.4
日本国外に移動・生息してほしい	1	0.2
その他	7	1.3
回答者数	560	100

表34. 現在のコウノトリの生息数について (N=538).

	回答数	割合 (%)
多いと思う	93	17.3
ちょうどいいと思う	189	35.1
少ないと思う	256	47.6
回答者数	538	100

表35. 今後のコウノトリの生息数について (N=535).

	回答数	割合 (%)
増えてほしい	353	66.0
現状の数を維持してほしい	175	32.7
減ってほしい	7	1.3
回答者数	535	100

表36. 給餌のあり方.

	回答数	割合 (%)
緊急的には給餌をするべきだと思う	173	31.7
厳密に決める必要はないと思う	140	25.6
厳冬期には給餌をするべきだと思う	111	20.3
原則給餌をするべきだと思う	60	11.0
関心・興味がない	29	5.3
何があっても給餌をするべきではないと思う	14	2.6
その他	19	3.5
回答者数	546	100

表37. 現在の給餌状況の認知と回答した給餌のあり方との関係.

回答/現状の認知	知っていた	知らなかった	合計
給餌をするべきではない	9 (2.3)	5 (3.2)	14 (2.6)
緊急的には給餌	128 (32.8)	45 (28.8)	173 (31.7)
厳冬期には給餌	84 (21.5)	27 (17.3)	111 (20.3)
原則給餌をするべき	44 (11.3)	16 (10.3)	60 (11.0)
厳密に決める必要なし	102 (26.2)	38 (24.4)	140 (25.6)
関心・興味がない	13 (3.3)	16 (10.3)	29 (5.3)
その他	10 (2.6)	9 (5.8)	19 (3.5)
合計	390 (100)	156 (100)	546 (100)

括弧内は割合 (%) を示す.

で、給餌のあり方を説明した。結果は、まず知っているか否かは、「知っている」が71.2%、「知らない」が28.8%であった(回答者数556人)。さらに給餌のあり方は、「緊急的には給餌をするべきだと思う」が31.7%と最も多く、次に「厳密に決める必要はないと思う」が25.6%、「厳冬期には給餌をするべきだと思う」が20.3%と続いた(表36)。「原則給餌をするべきだと思う」が11.0%であるのに対し、「何があっても給餌をするべきではないと思う」が2.6%であることもふまえると、多くの回答者で給餌については肯定的に考えていることがわかる。さらに、郷公園で餌を食べていることを知っていたか否かで回答が異なるのか、表37に整理した。期待値の関係で統計的検定は実施できないが、表37からは、「知っていた」回答者は給餌に肯定的であり、「知らなかった」回答者は「関心・興味がない」割合が高いことが伺える。放鳥コウノトリの置かれている状況についての関心・興味の度合

表38. 将来農業に被害を与えると思うか (N=561).

	回答数	割合 (%)
被害を与えると思う	105	18.7
被害を与えないと思う	119	21.2
わからない	337	60.1
回答者数	561	100

表39. 深刻な被害が発生した場合の対処方法.

	回答数	割合 (%)
被害がまだ発生していないので現段階で議論する必要がない	229	54.3
被害農家への金銭的補償	90	21.3
何もするべきではない	31	7.3
関心・興味がない	25	5.9
捕獲、場合によっては駆除	24	5.7
その他	23	5.5
回答者数	422	100

いが、給餌の是非では差異が出た結果となった。

次に、生息の結果、可能性としてある農業被害について質問した結果を報告する。

まず、将来、農業に被害を与えると思うかどうか質問した結果は、「わからない」が60.1%と最も多く、「被害を与えると思わない」が21.2%、「被害を与えると思う」が18.7%であった(表38)。コウノトリがかつて野生下で生息していた当時、農業従事者から害鳥視されていたこともあり、野生復帰による生息数の増加を懸念する声も聞かれるが、今回の調査結果では、「わからない」とする回答が最も多くなり、現時点では判断をしていない・判断ができないと考えていると思われる。

被害が深刻な場合の方法としては、「被害がまだ発生していないので現段階で議論する必要がない」が54.3%と最も多く選ばれていた(表39)。次は「被害農家への金銭的補償」が21.3%であるが、多くの回答者が「現段階で議論する必要がない」と考えていることがわかる。

6. 野生復帰の評価と回答者の参加姿勢

本節では、野生復帰の評価と、野生復帰が成功するた

表40. 野生復帰の評価 (N=549).

	回答数	割合 (%)
おおいに評価する	265	48.3
少し評価する	146	26.6
どちらともいえない	84	15.3
あまり評価しない	20	3.6
ほとんど評価しない	13	2.4
わからない	21	3.8
回答者数	549	100

めに回答者が何かする意思 (参加姿勢) を質問した結果を報告する。

まず、野生復帰の評価であるが、結果、「おおいに評価する」が48.3%と最も多く選ばれ、「少し評価する」の26.6%を合計すると、回答者の74.9%が野生復帰を評価

していた (表40)。

評価理由に関しては、278人の記述回答をいただき、評価毎に理由を整理した (表41)。

「おおいに評価する」では、環境面での記述が最も多く、次に知名度やこれまでの保護活動の評価、そして、

表41. 野生復帰の評価理由.

		回答数	割合 (%)
おおいに評価する		(152)	-
環境	豊岡の環境がよくなる、環境が良くなった証、環境について考える機会となった等	38	25.0
知名度	豊岡の知名度が上がった、豊岡が有名になった等	31	20.4
保護活動の評価	今までの保護活動の到達点、長年の苦勞が実り素晴らしい等	22	14.5
コウノトリの目撃	空を飛んでいるコウノトリを見て感動した、見ると幸せな気分になる等	19	12.5
観光	観光客が増えた等	17	11.2
野生復帰そのものの評価	世界初の試み、世界的に評価される試み等	14	9.2
活性化	活性化への貢献、起爆剤等	14	9.2
誇り・シンボル	豊岡市の誇り、シンボルである等	6	3.9
経済効果	-	5	3.3
農作物の無農薬化	-	4	2.6
もともと野生の鳥	-	4	2.6
協力・結束	多くの市民が協力した、結束した等	3	2.0
その他	経済効果、郷公園の周辺の整備、ロケットの打ち上げ、市長の頑張り等	11	7.2
少し評価する		(77)	-
知名度	-	14	18.2
環境	-	13	16.9
観光	-	10	13.0
保護活動の評価	-	6	7.8
コウノトリの目撃	-	6	7.8
税金	税金をかけすぎ、他の施策にもお金をかけてほしい等	6	7.8
野生復帰そのものの評価	-	5	6.5
新聞テレビ報道	新聞テレビで報道されている等	5	6.5
コウノトリばかり	コウノトリばかりに力を入れている等	4	5.2
その他	活性化、誇り・シンボル、コウノトリが増えた、コウノトリが増えすぎた、農業被害への心配、まだ給餌している等	33	42.9
どちらともいえない		(32)	-
コウノトリばかり	-	6	18.8
税金	-	5	15.6
変わりなし	自分の生活において何も変わっていない等	3	9.4
農業被害	害鳥になる可能性がある等	3	9.4
野生復帰への疑問	自然に任せた方がよい、野生復帰が必要か疑問等	3	9.4
その他	良いか悪いかわからない、長所短所がある、知名度が上がった、観光につながらない等	11	34.4
あまり評価しない		(11)	-
税金	コウノトリに使うなら減税してほしい等	5	45.5
コウノトリばかり	-	2	18.2
農業被害	-	2	18.2
その他	コウノトリが飽きられてきているので他の方法を考えて欲しい、あまり増やさないでほしい等	4	36.4
ほとんど評価しない		(4)	-
野生復帰への疑問	野生復帰は人間の自己満足等	2	50.0
コウノトリばかり	-	1	25.0
コウノトリが好きではない	-	1	25.0
わからない		(2)	-
税金	他に使うところがあるのでは?	1	50.0
観光	観光客が多くなれば評価できない	1	50.0

括弧内は各カテゴリの小計を示す。

実際に放鳥コウノトリを目撃して感動したという記述もあった。一方、「少し評価する」では、「おおいに評価する」と同様の理由の記述が多かったが、同時に「税金を使いすぎている」や「コウノトリばかりに力を入れている」、農業被害への懸念などを記述する回答もあり、それが「おおいに評価」ではなく、「少し評価する」となっている背景になっていることが伺えた。

「どちらともいえない」では、評価する理由よりも、「コウノトリばかり」や「税金を使いすぎている」など評価しない理由を記述する回答が多かった。また、野生復帰そのものへの疑問を記述する回答者もいた。「あまり評価しない」では税金面での記述が多く、「ほとんど評価しない」では「野生復帰は人間の自己満足」とする野生復帰そのものへの疑問を記述していた。「わからない」では、税金や観光面での記述であり、判断を留保するのではなく、評価に関して否定的な記述であった。

次に、野生復帰が成功するために回答者が何かする意思（参加姿勢）を質問した結果、何かする意思のある回答者は62.5%、意思のない回答者は37.5%であった（回答者数552人）。これまでの質問では、野生復帰やコウノトリの生息に肯定的な回答が多かったが、その割合と比較すると、若干低いように思われる。やはり、肯定的な意見を持っていても、何らかの形で関わる（参加）までには至っていないともいえる。

そして、具体的な内容は、「環境に配慮した生活を実践する」が60.2%と最も多く選ばれていた（表42）。次に、「コウノトリを大事に思うようにする」が46.5%と続いた。生息地整備といった、直接コウノトリのためにする内容の割合はあまり高くなかった。

表42. 野生復帰が成功するために行なう内容（複数回答を含む）。

	回答数	割合 (%)
環境に配慮した生活を実践する（ごみ減量、省エネなど）	207	60.2
コウノトリを大事に思うようにする	160	46.5
農業をできるだけ使わない／できるだけ使っていない作物を買う	94	27.3
コウノトリの生息地づくりに協力する（田んぼ・湿地・里山など）	52	15.1
コウノトリを活かした経済活動に協力する（コウノトリ関連商品の販売・購入など）	51	14.8
その他	8	2.3
回答者数	344	-

7. 豊岡市の課題

最後に、豊岡市の課題として、12項目を挙げ、それぞれの重要度を質問した結果を報告する。これは、今後の

研究課題として、どのようなニーズを考えているかで、野生復帰及びコウノトリの認識が異なってくると考えたからである。

結果は図4に整理した。回答者が重要度を置いている上位には、「医療・福祉サービスの充実」「雇用の確保・就労支援」「自然災害への対策」であり、下位には「ごみ・リサイクル制度の充実」、「観光客の増加」、「鳥獣被害対策」であった。上位に来た、「医療・福祉サービスの充実」や「雇用の確保・就労支援」は、これまで度々指摘されてきた地方都市に共通した課題であるが、昨今の日本の経済状況も反映して、回答者の位置づけが高いともいえる。下位の中でも、「鳥獣被害対策」や「観光客の増加」は、豊岡市において課題でもあり、下位であるのは意外な印象を受けたが、回答者全体として農業従事者の割合が多くないこと、そして、「観光客の増加」の恩恵を自身あまり受けない回答者が、より直接的な「医療・福祉サービスの充実」や「雇用の確保・就労支援」を重視していることが伺える。

また、各項目の平均値と標準偏差（質問においても、「非常に重要」に4、「やや重要」に3、「あまり重要ではない」に2、「ほとんど重要ではない」に1を、併記していた）は表43に整理した。平均値は3.694から3.215の幅となった。標準偏差0.75以上は「公共交通・道路の整備」「鳥獣被害対策」「人口の減少」であり、回答者によって重要度の認識にばらつきがあることも伺える。一方で、

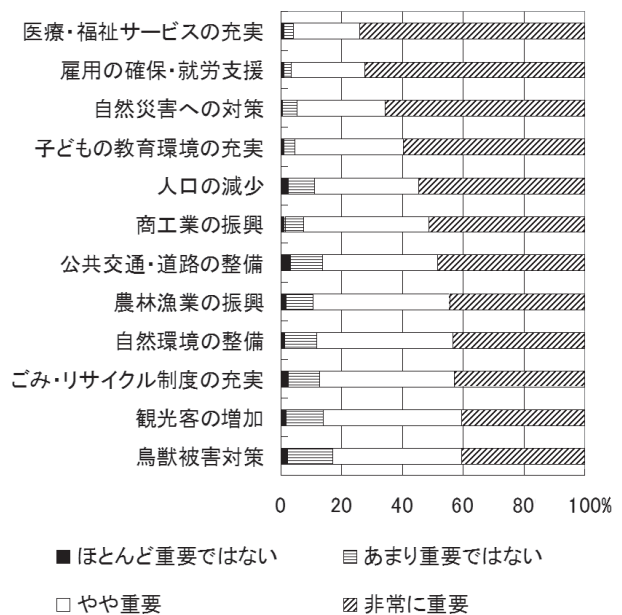


図4. 豊岡市の課題（医療・福祉サービスの充実 N=529、雇用の確保・就労支援 N=530、自然災害への対策 N=522、子どもの教育環境の充実 N=523、人口の減少 N=525、商工業の振興 N=517、公共交通・道路の整備 N=527、農林漁業の振興 N=510、自然環境の整備 N=523、ごみ・リサイクル制度の充実 N=523、観光客の増加 N=521、鳥獣被害対策 N=522）。

表43. 豊岡市の課題：各項目の平均値と標準偏差.

	平均値	標準偏差
医療・福祉サービスの充実	3.694	0.57
雇用の確保・就労支援	3.687	0.56
自然災害への対策	3.605	0.60
子どもの教育環境の充実	3.547	0.61
商工業の振興	3.429	0.66
人口の減少	3.413	0.75
農林漁業の振興	3.324	0.70
公共交通・道路の整備	3.317	0.78
自然環境の整備	3.310	0.70
ごみ・リサイクル制度の充実	3.279	0.74
観光客の増加	3.250	0.73
鳥獣被害対策	3.215	0.77

標準偏差0.5台であるのは「雇用の確保・就労支援」「医療・福祉サービスの充実」であり、これらについては、多くの回答者が重要であると認識していることがわかる。

まとめ

冒頭でも述べたが、現在豊岡市では2005年の最初の放鳥から5年を過ぎた段階であり、野生復帰及びコウノトリを住民がどのように捉えているのか、継続的に住民の視点から野生復帰の意義を明らかにするうえで、今回のアンケート結果は1つの重要な意味をもつ。

結果から、全体としては、野生復帰及びコウノトリに対して肯定的な捉え方をしていることがわかった。その背景は、今後の分析で具体的に見ていく必要があるが、まず、多くの回答者が放鳥コウノトリを実際に目撃したことが関係しているのではないと思われる。5年前のアンケート結果と比較して、目撃したことのある回答の割合は大幅に増加している。コウノトリを暮らしの中で意識する時において「実際の目撃」が最も選ばれていること、野生復帰を評価する理由において「実際の目撃」が回答の上位にあることをふまえると、コウノトリの目撃が、肯定的な意識に何らかの影響を与えていることが示唆される。

2点目として、この5年間でのコウノトリをシンボルとした活性化への取り組みが成果を上げ、それを回答者が評価していると推察できる。例えば、野生復帰賛成の理由で最も多く選ばれていたのが「豊岡市の活性化になるから」であった。コウノトリを地域活性化の起爆剤として、放鳥前から豊岡市などが活用してきたが、その取り組みが住民の中に浸透しており、評価されていることが伺える。

3点目としては、「豊岡市の象徴」として、「コウノトリ」が「かばん」とともに大きな割合を占め、二極化し

ていることが伺える。

4点目としては、コウノトリに対して、「野生の鳥」として捉えようとする傾向があった。例えば、野生復帰に対する責任について、「誰も担わなくていい」が最も多く選ばれていた。ただ、給餌に関しては、何らかの方法で給餌を実施することに寛容であったので、矛盾するような認識ともいえるが、放鳥コウノトリの目撃の有無において5年前よりも圧倒的にその割合を増加させていたこと、すなわち、コウノトリを目撃することによって、コウノトリを「野生の鳥」として認識するようになったと思われる。おそらく、現時点では、野生復帰の対象である保護鳥ではあるが、普通に飛んでいる姿を目撃する野生の鳥でもあり、その両方の側面を反映させた実態なのであろう。

以上、調査結果から、回答者全体として、コウノトリの野生復帰に関する取り組みは肯定的に捉えられていることが結論として言えるが、留意する点も見られた。まず、否定的な捉え方の中に、「コウノトリばかり」「他に税金を使って」「いくら税金をかけているのか」といった批判が多く見られた。これに関しては、「野生復帰の取り組みに関して、豊岡市が多額の税金を使っている」という認識があり、国や兵庫県の事業であっても、豊岡市の事業と誤解されていることが伺えた。「豊岡市の象徴=コウノトリ」が定着しただけに、全て豊岡市が行っている政策という印象を与えていると思われる。また、これらの批判は、否定的な捉え方をする回答者だけではなく、肯定的な捉え方をする回答者にも見られることは注視する必要がある。例えば、野生復帰の評価に関する質問において、前述の通り、「少し評価する」では、「おおいに評価する」と同様の理由の記述が多かったが、同時に「税金を使いすぎている」や「コウノトリばかりに力を入れている」、農業被害への懸念などを記述する回答もあり、それが「おおいに評価」ではなく、「少し評価する」ととどまっている背景になっていることが伺えた。したがって、豊岡市がどのような事業を行なっているのか、事業の必要性も含めて市民に説明することも必要といえる。

次に、野生復帰及びコウノトリに対して肯定的な捉え方をしているにもかかわらず、野生復帰が成功するために何かする意思のある割合は62.5%と、他の肯定的な回答の割合よりは低く、肯定的な意識と、参加・協力意識との間には差があった。回答者が自分とは関係のない取り組みとして見ている可能性もある。したがって、今後の野生復帰事業の展開でその差の動向を見ていくことも必要と思われる。

以上、簡便な報告となったが、回答者全体としての意識を明らかにした。最初の放鳥から5年経った時点で、住民が野生復帰及びコウノトリに対する意識が否定的ではなく、肯定的であることを考えると、今後のコウノトリの野生復帰事業の更なる展開に一定の期待が持てるとはいえる。しかし、前述した留意点に関して、野生復帰事業を推進する行政が住民の不安・不満を解消できるものはできるだけ解消していくことが、住民の肯定的な捉え方の継続には必要と思われる。

なお、5年前のアンケート結果との比較に関しては、単純比較はもちろんであるが、要因比較など複数のレベルで変化を分析する必要がある、今後順次報告していく。また、意識は動的に変化するものであり、野生復帰事業の展開に合わせて、定期的に同様のアンケートを実施し、住民意識を把握していきたいと考えている。

謝 辞

本研究では、2010年度住友財団環境研究助成（「コウノトリの野生復帰事業に対する住民評価の経時的分析」本田裕子）を受けて実施したアンケートを利用した。

アンケートに返信いただいた皆様にはお忙しいところ回答いただき、まことにありがとうございました。また、豊岡市コウノトリ共生部コウノトリ共生課の宮垣均氏を始めとする皆様には多大なご協力をいただきました。

皆様、本当にありがとうございました。

摘 要

2005年9月に行なわれた放鳥から約5年を経た時点で、野生復帰及びコウノトリをどのように捉えているのかを探るため、豊岡市全域住民を対象にアンケートを行なった。回答者は、無作為抽出した20歳から79歳までの男女1,000人とし、郵送により2011年1月に実施した。結果、全体として肯定的な捉え方をしていた。背景には、放鳥コウノトリの目撃の増加、コウノトリを地域のシンボルとした取り組みへの評価、「野生の鳥」として捉えようとする傾向が考えられる。また、「豊岡市が多額の税金を使っている」という認識もあった。否定的な捉え方をする回答者だけではなく、肯定的な捉え方をする回答者にも見られ、注視する必要がある。全体として肯定的であることを考えると、今後の野生復帰事業の展開に期待が持てる。しかし、行政が住民の不安・不満をできるだけ解消していくことも必要である。

キーワード アンケート、コウノトリの野生復帰、住民意識、放鳥開始後5年時点

引用文献

本田裕子（2006）野生復帰直後における住民の視点からのコウノトリ野生復帰の意義—新豊岡市全域のアンケート調査から。東京大学農学部演習林報告，116: 113–143。

（2011年11月8日受理）